第 24 回雲南懇話会資料

北の紙の道、南の紙の道　～樹皮紙、ダード・ハンターの残した空白

文書修復家、元)吉備国際大学教授

坂本　勇

日本だけでなく、紙を専門に扱う欧米の芸術や修復の専門教育の場で、今もダード・ハンター（Dard Hunter 1883-1966）の「紙の伝播マップ」<画像①>しか使われず、進展していないことは驚きである。また、マップ上に空白の状態となっているアジア地域の尊厳のためにも非常に惜しまれる状況である。

かって、「北の紙の道」の発見がヘディン、スタイン、ベリオ、大谷など多数の探検隊の派遣と巨額な資金の注入の成果に基づくものであったが、「南の紙の道」の大いなる発見には昔と異なり、多数の個人、勇気あるチャレンジャーの忍耐強い努力と応分の資金が必要となるのだろう。必ずや、発見の小さな痕跡が点となって拡がっていき、いつか点から線に、そして線から面に発展していかなければならない。

この 10 年余のフィールド調査において、猛烈な開発の波に流され、点すらも探すのがやっと、という状況であった。中国、韓国、日本などを除くアジアの地域には、あたかも古き時代には紙の文化がなかったような錯覚に陥る。

思い出すことは、今から 10 年ほど前にインドネシアに文書の調査に出かけた時、インドネシアの紙文化はヒンズー教の貝葉文書を除けば、ポルトガル人やオランダ人が来て以降に始まり、国立図書館の蔵書も 17 世紀以降のものばかりである、というレクチャーを受けた記憶がよみがえる。やっとこの 10 年の調査研究で、インドネシアにも古くから貝葉文書以外のカジノキを使ったダルワン紙やワヤン・ベベールの存在が知られるようになり、認識はずいぶん変わってきた。

ベトナムにおいても、ベトナム製紙の起源は 3 世紀頃に遡るとハノイの歴史博物館展示には書かれているが、ベトナムの紙の歴史についての著述は武有識氏の「河西省-芸の里、文の里(第一集　安穀の古伝紙芸)」くらいで、ハノイより北方地域やホイアン近郊中部地域など、ほとんど調査がされておらず全容は明らかにされていない。

かって、ダード・ハンターは、まだ古き佳きハノイの手漉き工房が多く残っていたランブオイ、イエンタイを訪問し道具などを入手している。しかし、ベトナムの手漉きに特徴的な原料植物 Do やネリ材の Mo という樹木などについては一切言及していない。さらに、ベトナム最高の皇帝の紙であるガンボウジで黄色く染め、両面に吉祥文様を金銀で描いた 50cmx130cm ほどの龍騰紙(SAC paper)についての記述が全く見られない。

これまでのフィールド調査研究によって、素材の調査研究と共に、この龍騰紙を特権的に製作してきた頼家(調査時点で 20 代目 Lai Phu Bang、初代は 1460-97 年)が中国から来て 500 年以上の歴史を連綿と刻む家譜を所持する、世界でも稀有な伝統紙製作の家柄であることが判明した。（龍騰

紙については、『アジアにおける歴史的文書史料の修復保存総合調査第２回調査団報告書』に科学的データを加え少し書かれているが、詳細を書いたものはまだない。）

ベトナムの龍騰紙

今後の「南の紙の道」の調査研究が進展することにより、多くの南方文化のナゾが解明され、古代からの南方ならではの製紙原料や技法の多様性、歴史性が明らかになってくるだろう。それは同時に、アジア地域でこれまで紙の文化がなく文化的貧困地域と烙印を押されていた地域に誇りを生み出す。それにより、実態と大きくずれてきてしまった「紙の道」というものの多様性が理解され、全体像が是正されていくことであろう。

願わくば、生きた化石の痕跡が消滅してしまう前に、遅れている「南の紙の道」研究を盛んにすることは必要とされる。

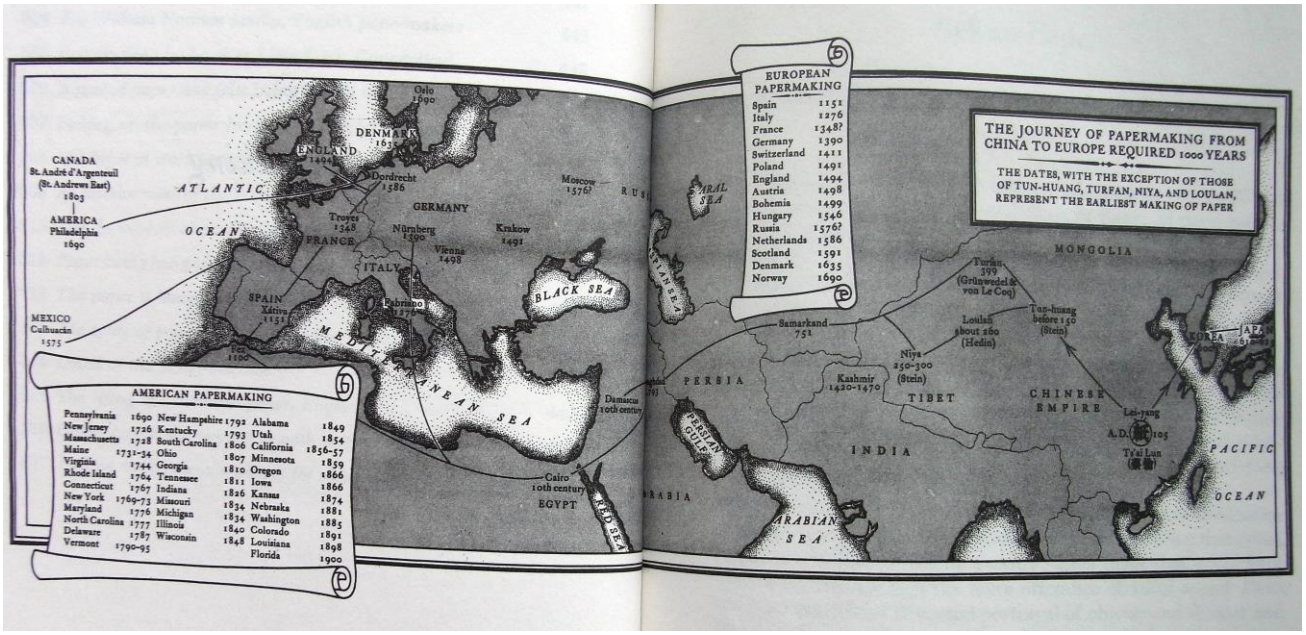
2002 年までのフィールド調査の多くは、国際交流基金アジアセンターの画期的な助成で行われたものであり、『アジアにおける歴史的文書史料の修復保存総合調査第 2 回報告書』(1998 年)、『ベトナム中南部における少数民族歴史文書現地調査』(2001 年)、そして『季刊和紙』17 号（1999 年）「ベトナムのモーは魔法か？　雲南手漉き紀行」、19 号（2000 年）「インドネシアの幻の紙ダルアン」、『ACADEMIA』No.71 号(2001 年)「ヴェトナム・チャンパ王国と歴史文書」、『吉備国際大学社会学部研究紀要』12 号（2002 年）「ヴェトナムにおけるチャム、ラグライ族の伝統文書と製紙技術」などとして報告された。

今後の注目すべき点は、樹皮を叩き延ばして作る樹皮紙/樹皮布の表面に、透かし模様 water-mark を浮き上がらせる非常にユニークな(石器)ビータ＜画像②－⑧＞の世界的な発見例を増やしていくことだ。中国広州市を流れる珠江河口デルタ地帯の遺跡から、現在最古の事例となる今から 6,800 年前頃の樹皮紙/樹皮布を製作する石器ビータが複数発掘されているが、世界各地で広く出土している石器ビータの形状と分布を世界地図にマッピングし、オーストロネシア語族に関わると考えられている樹皮紙/樹皮布の製作技術・用語・原料植物(カジノキなど)の起源と伝播ルートを解明していくことが期待される。

これまでのところ、雲南地域では樹皮布生産とペイ族などによる原始的な紙の生産が報告されているが、書写および描画用の樹皮を打ち叩いて製作した樹皮紙 Beaten Bark Paper については報告されていない。しかしながら 2002 年 3 月の中部ベトナムでの現地調査で、樹皮紙を使った古文書が見つかり、ベトナムでも樹皮紙が使われていたことを確認した。だが、樹皮紙のことは忘れられてきたことから、判別できる人々もいなくなっている現実がある。

雲南地域においても、注意深く調査を行うと樹皮紙が発見される公算はあるが、埋もれた長い歴史を解き明かしていくには多大な時間と努力が必要であろう。

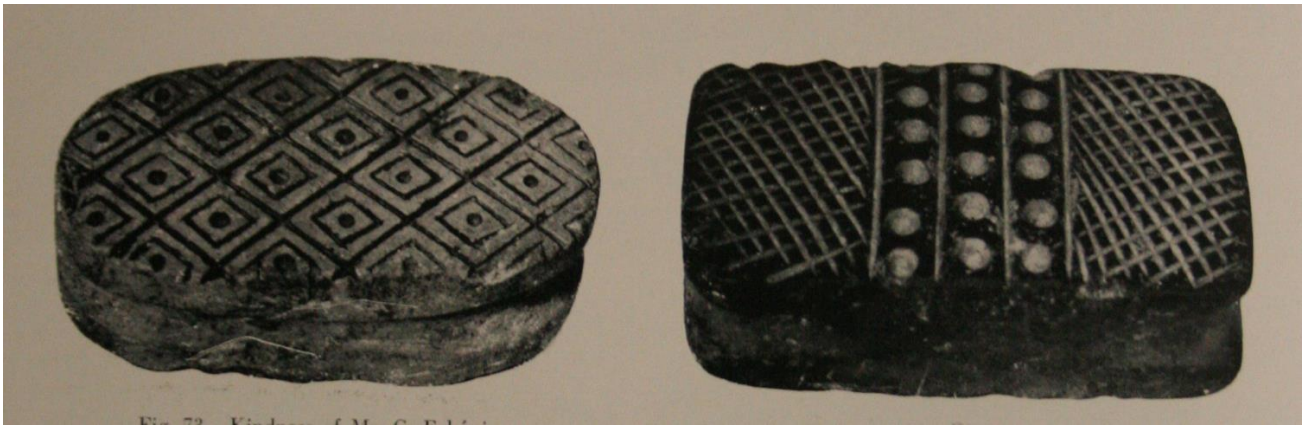
① ダード・ハンターによる「世界の紙の伝播マップ」



② 中国宝鏡遺跡で出土した今から約 4,000 年前の透かし模様の刻まれた石器ビータ

③ メキシコで出土したマヤ古典期 AD8 世紀頃のマヤ絵文字の刻まれた石器ビータ

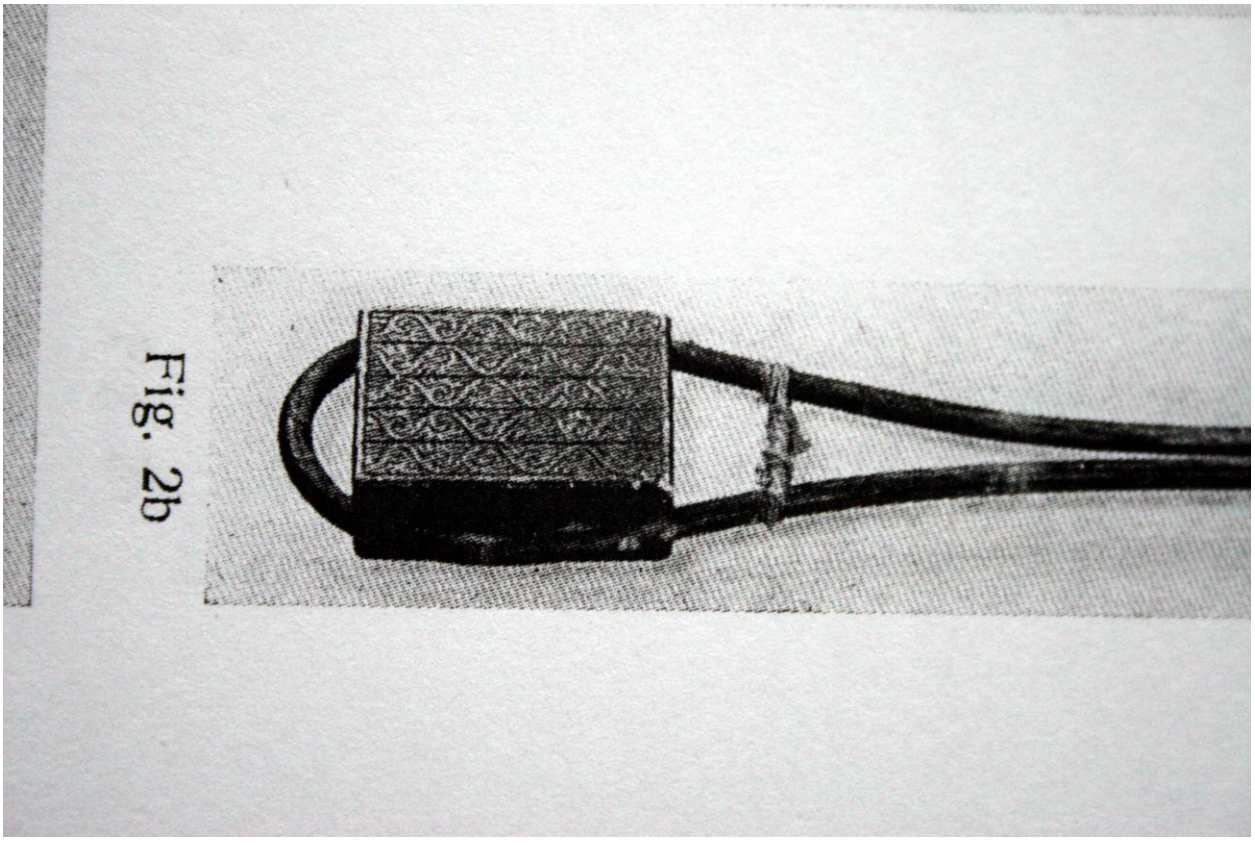
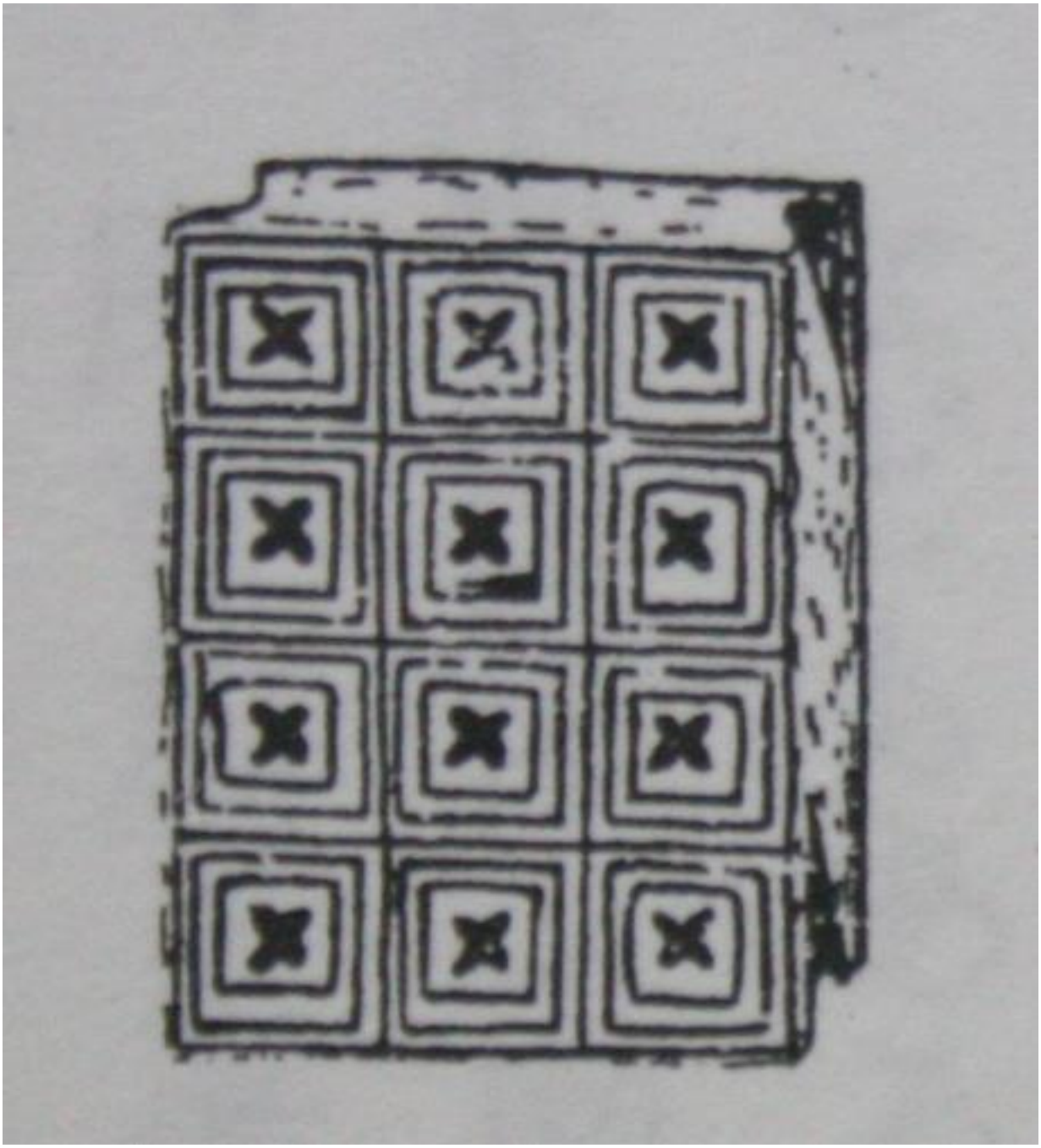
④ メキシコで出土した幾何学模様の刻まれた石器ビータ（メキシコ Ampalo 博物館蔵）



⑤ 透かし模様の刻まれた石器ビータを今も使用する中部スラウェシの婦人（日常的には使わず、シャーマンが儀式で使う頭巾など特別な用途にのみ使用する）

⑥ 婦人の所蔵する透かし加工用の模様が刻まれた石器ビータ

⑦ オランダ・ライデン民族学博物館が所蔵する、透かし模様の刻まれた石器ビータ



⑧ オランダ人宣教師 A.C.Kruyt が中部スラウェシで発見した、透かし模様の刻まれた石器
ビータ